

国際ロータリークラブ2830地区の皆様

津軽鉄道の乗り心地、いかがでいらっしゃいますでしょうか。

先月下旬、工藤孝子様から今日の皆様の会に誘っていただいて、もう乗ることがないと思っていた懐かしい津軽鉄道に乗れるというのは、本当にありがたく嬉しいお話だったのですが、90歳を過ぎた老齢のうえに両足を修理している身では、お断り申し上げざるを得ませんでした。

工藤様のお話によりますと、皆様の会では、パキスタンの子供たちのポリオの予防や治療の支援を続けていらっしゃるとのこと。そのことを伺って、私も子供の時にポリオに罹患したことがあり、通院するのに長期間津軽鉄道を利用して、津鉄と私との関わりにも深いものがございましたので、そのことを皆様にお伝えしたく、工藤様にこの手紙を託させていただきました。

津軽鉄道が敷かれたのは1930(昭和5)年だそうですから、昭和の15年戦争の発端となった満州事変の前年です。私は、その翌々年弘前市で生まれて、1933年満1歳の時から小学校3年生まで、今は合併して五所川原市になっている金木町に住んでいました。考えてみますと、その頃の金木町は、長年の夢だった汽車が走って、町全体が喜びに満ち溢れている時だったのです。そして、その喜びは、私の両親にとっても同じでした。

私の父は営林署に勤務していました。営林署というのは国有林の管理人ですから、所在地はほとんどが山間地です。弘前市とか大鱒町とかの多少とも都会風の所に住んだのは最初の若い頃だけで、署長になってからは僻地の営林署をあちこちと転勤して、庁舎と隣り合わせに建っている宿直勤務も兼ねた官舎での生活が長いこと続きました。津軽半島突端の三厩村での勤務が一番の僻地だったそうで、当時交通手段は青森市への船だけという無医村での暮らしの中で、5歳の娘を死なせたのが、人生で一番悲しい事だったと、その時しか見たことのない寂しい表情で母が話したのを、一度だけ聞いたことがあります。

そんな辛いことがあった数年後に、満1歳と4歳の子供を連れて、鉄道が通ったばかりの、町立病院のある、金木町に住めることになったのですから、両親の喜び

は大きかったと思います。

その鉄道と病院が我が家の救い主になってくれたのは、金木町に住んで7年目のことでした。小学校1年生の私がポリオに罹ったのです。夏休みに近い頃、高熱を發した私は、病院からもらった薬を飲んで寝ていたら数日で熱は下がったのですが、手足が全く動かなくなってしまいました。当時の金木病院は総合病院とは名ばかりで、各科の専門医がいるわけではなく、小児科の専門医も不在でした。熱が続いて疲れたのだからしばらく様子を見ましようという担当医の指示に従って、家でおとなしく寝ているうちに少しずつは動けるようになりました。背中に布団を積んで寄り掛かってちょっとの間だけは座れるようにはなりましたが、それ以上はなかなか進歩しません。動けなくなってから10日ほどたってからだったでしょうか。五所川原町の西北病院で診察してもらうことになりました。両親にしてみれば随分と心配だったろうと思うのですが、私は子供の時から楽道家だったらしく、痛いとか苦しいとかということにはなかったので、落ち込むことは全くありませんでした。両親共に生まれ育ったのが弘前でしたので、弘前へは津軽鉄道と五能線を乗り継いで時々出掛けていたのですが、列車に乗るのはいつも楽しみで、その時も行先が病院であろうと、明るい気分で車窓の景色を眺めていた記憶があります。

西北病院にはその翌日入院しました。入院中は電気療法が主だったのですが、快方に向かう時期でもあったのか、両腕から始まって次第に体が動くようになりました。一番嬉しかったのは、指先が使えるようになった時でした。スプーンを早く卒業したくて箸に挑戦したのですが、なかなかの難事業でした。今の私は、お茶漬けや卵かけご飯など、ご飯を匙で食べていることが多いのですが、まだ箸も使えるから気軽に匙にするのであって、手が駄目になったら、きっと箸が恋しくなるのだろうなど、納豆ご飯を匙で食べながら子供の頃を思い出したりしています。入院中の食事に箸が使えるようになった頃は、ベッドに座って本のページもめくれるようになり、買ったり借りたりした本を病室にどっさり積んで、同じ病棟の子供が借りに来て友達ができるなど、入院生活も日に日に明るい方向に向かうことができました。

半月ほどの入院で、よちよちながら歩けるようになって退院し、その後は、どれくらいの期間だったか忘れましたが、かなり長いこと、津軽鉄道に乗って電気療法

に通院しました。汽車に乗れることと、母親を独り占めして五所川原駅前の食堂で昼食を食べるのが嬉しくて、通院も苦になりませんでしたから、もともと脳天気な性格だったのでしょう。幸い後遺症は、運動神経が極端に鈍くなったことだけでした。運動会に人並みに参加したのは、生涯にただ一度小学校1年の春の運動会ですが、周囲にいじめられることもなく、教職に就いてからも、同僚たちに配慮してもらって不得手なことはやらずにすみしました。

90歳を過ぎて、これまでの人生を振り返ってみますと、6歳の時のポリオ罹患は、大きな出来事だったのだと改めて思います。でも、それは決してマイナスばかりではなくて、私を成長させてくれた事柄もありました。夫が他界してから20年以上にもなる独り暮らしを、さほど落ち込むことなく続けていられるのは、読書好きであることが大きく貢献しているのですが、私の読書好きの根源は、6歳の時の病床での童話や絵本にあったように思いますし、現在私は、ポリオの後遺症とは全く関係のないことが原因で歩行困難の状態ですが、「足は駄目でも手があるさ」と、気持ちはいたって元気です。これも、弱い運動機能に代わって、自分の力で動かせる機能を最大限に利用することが、自然に習慣化されたおかげかもしれません。

私がポリオを体験して86年、日本の社会からは、かつて幼い子供の命を奪った様々の病気を追放することができました。皆様が支援なさっているパキスタンの子供たちにも、そうした幸せの日の早く訪れますことを切に祈ります。そのためには、愚劣な戦争のない国際平和が必須の条件です。私の罹病が数年遅かったとしたら、日本は、全土が太平洋戦争の戦火に襲われていて、列車で病院に通うなんて到底不可能な時代、私は、今こうしてこの世に居ることはできなかつたはずです。

私の生涯にわたる乗車体験の中で、最も貴重な思い出となっている津軽鉄道が、皆様の今日の思い出の中にも、何かを残してくれることを期待いたします。

最後になりましたが、皆様の国際平和のための支援活動に心から敬意を表し、ますますのご活躍をお祈り申し上げます。

貴重な時間に駄文を割り込ませていただき、ありがとうございました。

2024年10月15日 13夜の月の照る夜更けに

佐藤 きむ